

視 角

「子どもに寄り添う」とは

—子どもと大人の具体的な生として—

金 允貞

「子どもに寄り添う」という言葉は保育の場では非常になじみのある言葉の一つです。私自身も実践の現場や研究の場で保育を語る時、何となくこの言葉の意味がわかっていくように使ってきました。しかし、今回「子どもに寄り添う」という題を頂いて、「寄り添う」とは何かを考えてみました。簡単に答えることはできませんでした。

外国語を学んだ人なら誰でも感じるものの一つが、どうしても母国語には訳せない言葉があるということだとだと思います。韓国人である私には「寄り添う」という日本語がその一つで、どうしても韓国語に訳せなく、訳しても日本語の意味から変わってしまう言葉でした。私が「寄り添う」という言葉が語り難

いと思う一つの理由がここにあるかもしれません。日韓辞典によると、「寄り添う」は「くっつく、(体を)すり寄せる」などの意味で身体的な行動と記されています。^平しかし、日本の保育で語られる「子どもに寄り添う」とは身体の直接的な接触というより、子どもの思いや気持ちなどに心を向け理解するという大人の精神的な働きを意味していると思われま

す。このような精神的な意味としての「子どもに寄り添う」は、前もって大人がもつべき意識のような響きがします。すなわち、大人が一方的に子どもに向ける精神、または意識という抽象的な意味を帯びているということ。しかし、「子どもに寄り添う」という言葉は、実際に大人が「子どもに寄り添う」ことを生きることなしには語れないものであると思います。言い換えると、「子どもに寄り添う」とは抽象的な言葉であるより、むしろ、全く具体的・実践的な言葉であるということです。すなわち、保育の実際を生きる大人のいう「子どもに寄り添う」とは、子どもとの間で「寄り添う」を実際に生きるこ

とを意味するのです。故に、大人が「子どもに寄り添う」時は、「子どもに寄り添う」ことが子どもと大人との行為の間で現れます。繰り返すと、「子どもに寄り添う」とは、大人の意識が先にあつて子どもに向ける行為ではなく、子どもとの間で行った大人の行為をいうのであり、故に、大人の一方的な行為ではなく子どもとの間にある行為であるといえるでしょう。

記録と考察―「Yに寄り添う」

これからは上述したことを念頭に置きながら私が考える「子どもに寄り添う」とはどういうことかを述べていきます。そのため、本稿では「子どもに寄り添う」ことを自分自身の実践から語っていきますが、自らの実践である故、保育における「子どもに寄り添う」ということをすべて述べているのではないということをおきましよう。保育の実践を語る時にはどういふ言葉で実際に語ってもそこから漏れてしまうことが起こり得ると思います。

現在、私には二歳二か月の息子がいます。本稿では息子と私の間で私が息子に「寄り添った」と思われるエピソードを取り上げて「子どもに寄り添う」とことはどういうことかを探っていきます。そして、それを明らかにするためにユダヤ人の宗教哲学者であるM. ブーバー(Martin Buber, 1878～1965)の思想に着目して考察していきます。ここで取り上げるエピソードは息子(以下、Yと表記します)が二歳を過ぎてから今でも母(私)との間でやっている遊びを記したものです。

カラーブロックで電車を作っていたYはソファーに座って自分を見ている私(筆者)を見上げました。その時Yはカラーブロックを床に置いて私の前に来て「赤ちゃん、やりたい」と言いました(母との間は韓国語で話していますがここでは日本語に翻訳して記します)。それで私は「そっか、おいで、赤ちゃん」と言つてYを抱き上げました。すると、Yは自分の体を横にして私に横で抱かれ「えくん」と泣き

まねをし始めました。それで私が「赤ちゃん、どうしたの。大丈夫だよ、ママがいるから」と言うと、Yはにっこり笑います。それからYは母の胸に口を近づけ「チュチュー」と母乳を吸うまねをして、また母ににっこり笑いかけました。

Yのこのような行為は一般的には赤ちゃん返りといわれるものだと思います。Yにはまだ下の子がいなく、赤ちゃん返りをする理由ははっきり言えませんが、とにかく赤ちゃんに戻りたいことを遊びとして母に表現しているように感じられる場面であるでしょう。しかし、Yとのこの遊びを生きた私は一度もYの行為を赤ちゃん返りだと思ったことがありません。Yとのこの遊びがいつ、どのように始まったかは覚えていないのですが、日々自ら成長に向かっていくYにとってこの遊びが大事であるように感じられた瞬間がありました。それは、まだ自分は赤ちゃんで残りたいとか、大きくなるのが不安だというはつきりした理由がわかる瞬間ではありません。

そうではなく、Yが他でもない自分になっていくことを自らが願いながらも母とはまだ離れたくないということに私に語りかけてきた行為であると、ある瞬間、私は感じたのです。

「感得する」「ことと「寄り添う」「こと

上記したエピソードを、M. ブーバーの感得（独：Innewerden、英：becoming aware）という概念から考察してみましょう。世界において常に真の関係とは何かを問い続けたブーバーは、晩年『人間の間柄の諸要素』という短い論文を書きました。そこでブーバーは「人間の間柄」で行われる、ある人がその相手を「感得する」ことについて述べています。ある人を「感得する」とは「精神によって規定された人格としての彼のすべてを認めることであり、彼の表現、行動、および態度のすべてを通じて把握し得る唯一性の徴証を刻印する活力的中心を知覚すること^{註2}」であります。これに従うと、大人が子どもを「感得する」とは人格としての子どもをすべてを認める

ことであり、子どもの表す行為を通してその子の活
力的中心を大人が知覚することであるといえましょ
う。また、この言葉を私とYとの遊びに引き下げて
考えると、私がYを「感得する」というのは、Yが
成長へと前進しながらもそれとは異なる思いを生き
る一人の人格としてそのすべてを認めることであり、
その遊びに表れる「活力的中心」を知覚することで
あります。ところが、ある人が相手を「感得する」
ことは二人が「根本的に（独：elementar）^本かわる」
時にもみ可能であるとブーバーは述べます。従って、
子どもに対する大人の「感得」は両者が根本的にか
かわっている時にのみ起こり得るものであります。

私はこのような子どもの行為に対する大人の「感
得」が「子どもに寄り添う」ことと似ているのでは
ないかと思えます。一方、保育においては子どもを
理解する一つのあり方として「子どもに寄り添う」
ことが多く言われてきたのではないのでしょうか。「子
どもに寄り添う」ことがこのような意味を帯びると、
それは両者の関係で生まれるものであるより、具体

性を欠如した大人の一方的な働きになります。しか
し、保育の実際には大人が子どもを理解しようとす
る前に、両者のかかわりの中で子どもの行為が大人
に「感得」される瞬間があります。子どもと大人の
間にこのような「感得」がなされるのは、大人が子
どもを理解しようと意識を働かせたためではありません。
「子どもに寄り添う」という言葉を、もう一度
子どもと大人が生きる生の中でとらえたらいかがで
しょうか。子どもを理解するために「子どもに寄り
添う」のではなく、子どもと共に生を生きながらか
かわり、そのかかわりにおいてなされる子どもの行
為を大人が「感得する」こと、まさにその瞬間「子
どもに寄り添う」ことが起きているといえるのでは
ないでしょうか。（お茶の水女子大学博士後期課程）

注

- 1 プライム日韓辞典 ドンア出版 一九九六年
- 2 Buber M (1968) 『人間の間柄の諸要素』佐藤吉昭・
佐藤玲子訳 ブーバー著作集2 対話の原理Ⅱ
みすず書房 pp.101-102
- 3 同右 p.102